

靴修理

靴職人・村上壘さん

靴をよみがえらせる熟練の技と“聴く力”

他店で断られた靴の修理も引き受けることで知られるハドソン靴店。

“靴の神様”に師事した2代目店主・村上壘さんは、
年間1,000足以上の修理をこなす。

“靴の神様”に弟子入り

靴をつくることができる職人なら、
修理もできるだろう――。

靴の修理について、多くの人はこ
う思っているのではないだろうか。
ハドソン靴店の村上壘さんも、最初
はそう考えていた。だがある日、女
性客からピンヒールの交換を頼まれ
たとき、背筋に冷や汗が流れた。

「ヒールのはずし方がわからなかつ
たんです」

現在、年間1,000足以上の修理の
注文が来る村上さんも、10数年前は
そんな状態だったのである。

20年ほど前、村上さんは靴職人に
なろうと考え、縁あってハドソン靴
店の初代店主・佐藤正利さんに師事
することになった。佐藤さんは吉田
茂元首相をはじめとする多くの著名
人の靴をつくり、靴職人の世界では

“靴の神様”と呼ばれた人である。

師の跡を継ぎ店の2代目に

以後、村上さんはハドソン靴店に
通い、靴づくりを教わった。同店に
は、同じように靴づくりを学びに来
ている若い職人が何人もいた。

かつて、靴業界では親方が食と住
の面倒を見ながら職人を育てる徒弟
制度があった。しかし1960年代には
靴も大量生産の時代に入り、徒弟制
度は崩壊した。それでも佐藤さんは
自分が徒弟制度で育てられたことに
恩義を感じ、若い職人を自らの手で
育てていた。

佐藤さんの下で靴づくりを学んだ
村上さんは、一人前になると浅草の
靴メーカーに就職して念願の靴職人
となった。だが、給料は驚くほど安
い。別の道を模索するという考えも、

頭に浮かび始めた。そんなとき、師
匠の佐藤さんが亡くなったという知
らせが入った。

「先代に師事した人はたくさんいま
しましたが、店を継ごうとする人はいま
ませんでした。靴職人として独立して
稼いでいくのは難しい時代になっ
ていましたし、店の立地が悪かったか
らでしょう」

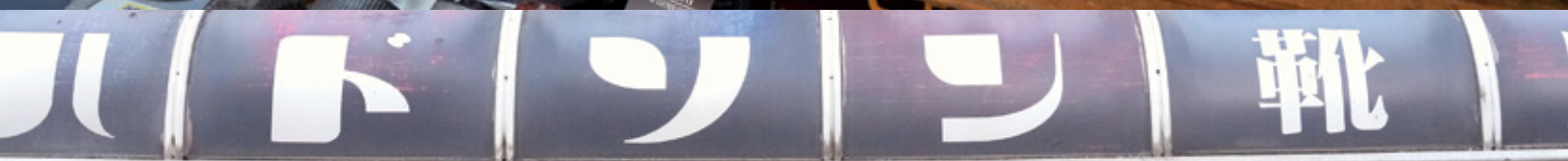
しかし村上さんは「このまま靴職
人をやめるのはもったいない。もう
少しあがいてみよう」と決意。ハド
ソン靴店を継ぐことを決めた。

独学で身に付けた修理技術

ハドソン靴店は横浜市神奈川区に
あり、都心からは少し離れている。
そのためか、靴をオーダーする客は
めったに来なかった。

「今はブランディングが大事な時代。

修理に使う部材の種類も半端ではない。革に色を着けるインクも100色以上。革底も大きさはもちろん、厚さも0.5mm単位で違うものを揃えている



むらかみ・るい 1982年、神奈川県生まれ。靴メーカー勤務を経て2011年5月、ハドソン靴店の2代目店主に。亡くなった家族の形見の靴など、それぞれ思い入れのある靴を鮮やかによみがえらせる確かな技術と丁寧な対応が評判となり、フランスから靴の修理の注文が来たこともある。最近、大人が履き古した靴を赤ちゃんが履くファーストシューズにつくり直すサービスも始めた。<https://www.hudsonkutsuten.com>





張った4本の麻糸をよって、温めた松やにを素早く塗り込む。針に糸を通したら手際よく靴の本底に帯状の革を縫い付けていく

何十万円も払って靴をオーダーしようという人は、銀座や青山の店に行ってしまうのです」

ところが、靴の修理を頼む客はときどき来る。それもわざわざ遠方から訪れる客もいる。疑問に思い、何人かの客にそれとなく尋ねてみた。すると、他店で修理を頼んだものの、断られた客が多いことがわかった。「ここにビジネスチャンスがあるかもしれない」

そう感じた村上さんは、「他店で断られた修理も引き受ける」姿勢を明確に打ち出した。

他店で断られた経験のある客は、靴店に対して警戒心や不信感を抱いていることが珍しくない。そのため村上さんは、靴の好みやどのような修理を望んでいるかを、じっくりヒアリングすることになっている。1～

2時間かけるのも普通だ。

「直せる技術をもっているのは、職人として当たり前。そのうえで、お客様の心を解きほぐしながら、要望をしっかりとヒアリングできてこそ、よい職人だと思います」

ただし、村上さんが師である佐藤さんに教わったのは靴づくりの技術だけだった。修理の仕方は教わっていない。そのため、村上さんは修理技術を独学で身に付けた。

靴は履いているうちに、損耗度や形の歪みなどが左右で違ってくる。それを無視して左右を同じように直してしまうと、逆にアンバランスになってしまう。修理には、細かな配慮が必要だ。

修理するうえで重要なのが、耐久性、履き心地、ファッション性という3要素。だがこの3つは、耐久性を重視すれば履き心地とファッション性が下がるというような微妙な関係にある。客がどの要素を大事にしているかを知るためにも、丁寧なヒアリングが不可欠だ。

ヒアリングすればいろいろな事情が見えてくる。亡くなった家族の形見の靴、母親が就職祝いでプレゼントしてくれた靴など、修理を頼まれる靴にはそれぞれの物語がある。しかし村上さんは、客が打ち明けたエピソードを記憶に残さないようにしているという。

「どんな靴に向き合うときでも、自分の心はフラットにしておきたいからです。お客様の求めていることに、全力で応えるのが自分の仕事。靴の



靴底を固定させる釘を打つ回数は多くて3回。打つ回数が少なければ少ないほどよい。戸棚にはいい具合に錆びた釘が出番を待っている

修理とエピソードは関係ないと考え
ています」

糸にも施される細かな工夫

本格的に靴の修理を始めた村上さんは、道具類や機械をすべて自分が使いやすいようにカスタマイズした。買ったままの状態を使っている道具は、1つもない。

靴底を固定させるために打つ釘は、わざわざ錆びさせてから使っている。そうすると釘が抜けにくくなるためだ。修理する靴の材質の厚みや製法ごとに使う釘も替える。

靴の革に色を着けるインクは、さまざまな染料を自分で調合したオリジナルのものを、100色以上そろえている。今はそのインクの販売もしている。だがそれは少しでも稼いだ

いから、ではない。

「溶剤や革の削り粉を吸ったりするからでしょうか。靴職人は割と短命なんです。でもオリジナルのインクを抱えたまま僕がもし死んだら、業界のためになりませんから」

昔ながらの製法で、靴の本底に帯状の革（ウェルト）を縫い付けるときには、麻糸に松やにを塗り込んだ“チャン糸”を使う。そうすることで糸同士の付きがよくなり、仮に糸が切れてもほつれにくくなる。

松やには気温が低いと硬くなる。だから冬場はストーブで作業場を暖めてから松やにを塗り込む作業に入る。最近は化学繊維の糸を使う職人もいる。その場合、松やにを塗り込

む作業は必要ない。だが、村上さんは麻糸にこだわっている。化学繊維だと構造上、麻糸に比べて長さを2倍にしなければいけないために仕事のスピードが格段に落ちるからだ。

松やには手で塗り込む。摩擦熱で松やにを柔らかくしながら塗り込むので、手早さが必要だ。ピンと張った麻糸に松やにを塗り込むときには、呼吸を整え、集中力を高める。狭い作業場に張りつめた緊張感が漂う瞬間だ。

「先代の域にはまだまだ及びません。でも、僕もこれからは職人を育てていきたいと思うようになりました」

自らもまた、技術を伝え、人を育てる存在へ。靴の製造も修理もできる二刀流の職人として、村上さんは今もなお“靴の神様”の背中を追い続けている。